

物静かで優しい義兄は、
一線を越えたら
私を貪って離さない男
でした

※このあと、本編冒頭からの
試し読みが始まります。

※最後に、本編後半の官能場面
を一部先行掲載しています。

——ここから本編冒頭の試し読みです。

第一話

姉のベッド

義兄は、姉のベッドをひとりで解体していた。

敷布団もシーツも、すでに取り払われている。

むき出しになった木の枠の前に膝をつき、恭介さんは六角レンチを回していた。

金具が擦れる音が、何もなくなりかけた寝室に響いている。

「手伝うよ」

声を掛けると、恭介さんは手を止めた。

「もう来てたんだ」

「玄関、開いてたから」

「ああ、そうか。荷物を運び出して、そのままだった」

立ち上がった恭介さんは、以前より少し痩せて見えた。

それでも、私より頭一つ以上高い身体と、シャツ越しにも分かる広い肩は、昔のままだった。

短く整えられた黒髪には、こめかみのあたりにわずかに白いものが混じっている。四十五歳になった恭介さんに老いを感じるより、姉と結婚した

頃にはなかった落ち着きが加わったように見えた。

姉が亡くなって一年半になる。

通夜でも葬儀でも、一周忌でも、恭介さんは取り乱さなかった。

泣いている母の背を支え、父や親戚に頭を下げ、最後まで姉の夫として振る舞っていた。

私の前で涙を見せたこともない。

「髪、切ったんだね」

突然言われ、私は自分の髪に触れた。

「先週」

「かなり短くしたね」

「肩にかからないくらいにいただけ」

「似合ってる」

「ありがとう」

誰にも気づかれなくても構わない程度の変化だった。

職場の同僚にも、母にも何も言われなかった。

「恭介さん、そういうところまで見てたんだ」

「見るよ」

短い返事だった。

姉が生きていた頃から、恭介さんは人の小さな変化によく気づいた。

髪を切ったこと。眼鏡を替えたこと。私がコーヒーにミルクを入れなくなったこと。

姉は、恭介は細かすぎるのだと笑っていた。

「あの人、優しいけど、決めたら譲らないよ」

以前、姉が笑いながら言ったことがある。

「私が大丈夫だって言っても、恭介が危ないと思ったら聞かないの。怒鳴りもしないのに、最後はあの子の言うとおりになってる」

「嫌じゃないの？」

「たまに腹は立つ。でも、あの人に守るって決められたら、たぶん誰も勝てない」

「お義母さんは？」

「今日は来ないって」

「体調でも悪い？」

「そうじゃない。姉さんのものがなくなるところを、
見たくないみたい」

「そうか」

「お父さんも、お母さんを一人にできないから」

「無理に来てもらうことじゃないよ」

責める様子はなかった。

恭介さんはいつもそうだった。

誰かを困らせない言葉を先に選ぶ。

「ベッド、今日処分するの？」

「明日の朝、業者が持っていく」

「新しい部屋には持っていけないんだ」

「置く場所がないし、一人には大きすぎる」

ベッドは姉と恭介さんが結婚したときに買ったものだった。

十年以上、二人が眠った場所。

姉夫婦に子どもはいなかった。この家で暮らしていたのは、初めから二人だけだった。

姉が病気になってからは、体調の悪い姉が一人で使い、恭介さんは書斎で眠っていたという。

姉が亡くなってからも、この部屋はほとんど変

わっていなかった。

恭介さんがこの家を手放すと決めるまで、ベッドも、箆笥も、カーテンも姉がいた頃のままだった。

「明日、引っ越すんだよね」

「うん」

「転勤は来月から？」

「正式にはね。向こうの部屋には明日から入れる」

「ずいぶん急だね」

「準備はしてたから」

恭介さんは再び床へ膝をついた。

私も反対側へ回り、外れかけていたベッドの側

板を支えた。

「それ、重いよ」

「二人なら大丈夫」

「濡さんは、そっちを持たなくていい」

「これくらい持てる」

側板を少し持ち上げた。

金属の擦れる音がした。

接合部分から留め具が外れ、支えていた側板が急に傾く。

指を挟まれる。

そう思った次の瞬間、手首を強くつかまれた。

「危ない」

身体ごと引き寄せられる。

側板が手を離れ、床へ倒れた。鈍い音が寝室に響く。

私は何が起きたのか分からないまま、恭介さんを見上げた。

「挟まなかった？」

「大丈夫」

「手、見せて」

恭介さんは私の手首をつかんだまま、指先を確かめた。

反射的な動きだったはずなのに、私の身体は一

歩も動けなかった。

思っていたより、ずっと強い力だった。

「痛くない？」

「うん。驚いただけ」

恭介さんの視線が、私の指先から手首へ移った。

まだつかんだままだと気づいたように、指が離れる。

急に自由になった手首に、恭介さんの指の熱だけが残っていた。

恭介さんは何も言わず、倒れた側板を一人で持ち上げた。

「こっちは僕が持つ。澤さんは、向こうの端を押さ

えて」

「分かった」

言われた場所へ手を置いた。

今度は恭介さんが金具を確かめながら、ゆっくり木の枠を外した。

恭介さんはそれを壁に立て掛け、次の金具へ取りかかった。

私は床に散らばっているネジを拾い、小さな袋へ入れた。

「平気？」

突然、恭介さんが尋ねた。

「何が？」

「この部屋に入って」

「平気だよ」

「滯さんは、いつもそう言うね」

「本当に平気だから」

「綾子が入院したときも、葬儀のときも言ってた」

「それは……みんな大変だったから」

「滯さんも大変だっただろう」

返事ができなかった。

私は姉の妹だった。

泣き続ける母を支え、何も話さなくなった父に
代わって親戚へ連絡し、姉の病室へ何度も通った。

恭介さんの前でまで弱音を吐くわけにはいかなかった。

最もつらいのは、妻を失う恭介さんだと思っていた。

「今は、本当に平気」

「分かった」

恭介さんは、それ以上聞かなかった。

ベッドの枠を外し終わると、寝室は急に広くなった。

床には、長年ベッドが置かれていた跡だけが残っている。

「こんなに広かったんだね」

「僕も忘れてた」

恭介さんは額の汗を腕で拭った。

「少し休もうか」

「まだ大丈夫」

「滯さんが平気でも、僕が休みたい」

「それなら休もう」

寝室を出る。

廊下にも段ボール箱が並んでいた。

姉の衣類や本、病院の書類。処分するものと残すものの区別が、まだ完全には終わっていない。

携帯電話が震えた。

母からのメッセージだった。

〈遅くならないうちに帰ってきなさい〉

続けて、もう一通届く。

〈恭介さんも、もう私たちの家族ではないんだから〉

画面を閉じた。

母が言おうとしていることは分かる。

姉が亡くなり、恭介さんがこの家を手放せば、私たちをつないでいたものはなくなる。

元義兄と、亡くなった妻の妹。

それ以上でも、それ以下でもない。

「お義母さん？」

恭介さんに尋ねられた。

「うん。遅くならないうちに帰ってこいって」

「そのほうがいい」

「でも、まだ片づいてない」

「残りは僕がやるよ」

「明日の朝までに全部終わらせるんでしょう」

「何とかなる」

「ならないよ」

段ボール箱の数を見る。

衣類だけでも、まだかなり残っている。

「泊まっていく」

口にしたあと、自分でも驚いた。

恭介さんが私を見た。

「無理しなくていい」

「無理じゃない。明日、朝から業者が来るなら、今日中に分けたほうがいいよ」

「遅くなったら、近くのホテルを取る」

「この家に布団はないの？」

「来客用のものはある」

「なら、ここで寝る」

恭介さんはすぐには答えなかった。

「お義母さんは心配すると思う」

「三十二歳の娘が一晩泊まるだけだよ」

「そういう意味じゃなくて」

「分かってる」

母が何を心配するのか。

私にも分かっていた。

けれど、明日の朝、この家から姉のものがすべて運び出される。

恭介さんが一人でその夜を過ごすことを考えると、帰れなかった。

「私が残りたいの」

恭介さんの目を見て言った。

「分かった」

長い沈黙のあと、恭介さんが頷いた。

「寝る場所は、あとで用意する」

「ありがとう」

「先に、少し休もう」

恭介さんは台所へ向かった。

「コーヒーでいい？」

「うん」

「いつもと同じでいいよね」

姉がいなくなっても、恭介さんは私の好みを覚

えていた。

第二話

一周忌の翌日

「砂糖は一つだったよね」

恭介さんは、戸棚からインスタントコーヒーの瓶を取り出しながら言った。

「覚えてたんだ」

「綾子が元気だった頃から、ずっとそうだったから」

「今も変わってない」

「そう」

それだけの会話なのに、胸の奥に小さな波が立
った。

姉がこの家に嫁いでから、私は何度もここでコ
ーヒーを飲んでいる。姉が夕食を作り、恭介さん
が食器を片づけ、私は客としてダイニングの椅子
に座っていた。

その頃から、恭介さんは私のコーヒーに砂糖を
一つ入れていたのだろう。

ただ、私が覚えていなかっただけで。

「ミルクはなし」

確認するように言われた。

「うん」

湯気の立つカップを受け取る。指先が触れたわけでもないのに、私はすぐに手を引いた。

ダイニングテーブルには、姉の衣類がいくつかの山に分けて置かれていた。

母に確認してもらおうもの。寄付に回すもの。処分するもの。

「これは？」

恭介さんが、紺色のワンピースを持ち上げた。

「お母さんに見せてから決めたい。姉さん、よく着てたから」

「分かった」

恭介さんは、母に確認してもらおうものの箱へワ

ンピースを入れた。

「この箱は、私が持って帰るね」

「頼む」

「恭介さんの荷物は、もうほとんど片づいた？」

「うん。ただ、新しい部屋はここよりかなり狭いから、家具や本はだいぶ減らした」

会社が用意した部屋には、明日から入れるという。転勤先での勤務は月が変わってからだが、荷物は明日の朝に運び出すことになっていた。

この家で過ごすのは、恭介さんにとっても今夜が最後だった。

「澤さん」

呼ばれて顔を上げると、恭介さんが灰色のカーディガンを持っていた。

見覚えがあった。

「あ」

「知ってる？」

「それ、私の」

「濡さんの？」

「五年くらい前に、姉さんに貸したの」

恭介さんはカーディガンと私を見比べた。

「返してもらってなかった？」

「何度か言ったんだけど、そのたびに『今度持って

いく』って」

肩の辺りに、小さな染みが残っている。

姉に貸したときにはなかったものだ。

「綾子らしいな」

恭介さんが、わずかに笑った。

「ひどいよね」

「ひどい」

「自分のものみたいに着てた」

「それも、綾子らしい」

私も笑った。

姉が亡くなってから、恭介さんと一緒に姉のこ

とで笑ったのは初めてだった。

これまで私たちは、姉について話すとき、無意識に言葉を選んでいた。

優しかった。明るかった。最後まで頑張った。

嘘ではない。けれど、姉は聖人ではなかった。人の服を借りたまま返さず、謝るより先に笑ってごまかすような人でもあった。

「持って帰る？」

私はカーディガンを受け取った。

毛糸に顔を近づけても、姉の匂いは残っていなかった。防虫剤と、長く閉め切られていた引き出しの匂いだけだった。

「少し考える」

「うん」

私はそれを、自分の鞆の横に置いた。

午後六時を過ぎる頃には、床に並んでいた箱の半分ほどが片づいた。

窓の外は暗くなり始めている。

「和室に布団を敷くよ」

恭介さんが言った。

「本当に泊まって大丈夫？」

「来客用の布団がある。僕は書斎のベッドで寝るから」

「書斎にもベッドがあるんだ」

「綾子が亡くなってからは、そっちで寝てた」

寝室の大きなベッドを使わず、恭介さんは一年半、書斎のシングルベッドで眠っていたのだ。

今日まで姉のベッドを解体しなかった理由を、私は聞かなかった。

「布団のカバーは押し入れの上にある。綾子の看病をしてた頃、お義母さんが泊まったときに使ってたものだけど、そのあと洗ってある」

「分かった」

「着替えは？」

「ない」

今日は手伝いが終われば帰るつもりだった。鞆の中にあるのは財布と化粧ポーチ、ハンカチくらいだ。

恭介さんは少し考えてから、寝室に残された箆筒を見た。

「綾子の部屋着なら、まだあるけど」

その言葉に、私は返事ができなかった。

箆筒を開けると、薄い水色のパジャマが畳まれていた。胸元に白い刺繍が入っている。

姉が入院する前まで着ていたものだった。

手に取ろうとして、やめた。

これを着て、この家で眠る。

姉の夫だった人の前に、この姿で立つ。

想像した瞬間、胸の奥に重いものが落ちた。

「やめておく」

恭介さんが私を見た。

「抵抗がある？」

「姉さんの代わりになったみたいだから」

口にしてから、言いすぎたと思った。

けれど、恭介さんは目を逸らさなかった。

「そうだね」

否定も慰めもしなかった。

「店が閉まる前に、必要なものを買ってくる。駅前

のスーパーなら、まだ開いてるから」

「車を出そうか」

「歩いていけるよ」

「暗いから気をつけて」

家を出て、駅へ向かった。

帰ることもできた。

駅まで行けば電車に乗れる。母には、やはり泊まらずに帰ると連絡すればいい。

それでも私は、改札には向かわなかった。

スーパーの衣料品売り場で、替えの下着と無地のTシャツ、柔らかな部屋着を買った。歯ブラシと化粧落としも籠に入れた。

一泊するだけのために買ったものが、白い袋の中に収まった。

それを持って、私は恭介さんの家へ戻った。

玄関の灯りが見えたとき、なぜか少しだけ安堵した。

夕食は、私がスーパーで買ってきた弁当で済ませた。

冷蔵庫の中はほとんど空になっていた。残っているのは水と調味料、明日の朝に捨てる予定の牛乳だけだった。

「引っ越したら、すぐ仕事？」

「荷物を片づける時間はあるよ。正式な赴任は来

月からだから」

「転勤先に、知ってる人はいるの？」

「同じ会社だから、何人かは」

「ずいぶん急に決まったように見える」

恭介さんの箸が止まった。

「話が出たのは、かなり前だよ」

「会社から言われたの？」

「いや」

恭介さんは箸を置いた。

「僕から希望した」

私は顔を上げた。

「自分から？」

「そう」

「姉さんとの家を手放してまで？」

「この家にいる限り、前に進めないと思った」

静かな声だった。

母が昼間に送ってきた言葉を思い出した。

恭介さんも、もう私たちの家族ではない。

恭介さん自身も、そうなるためにこの家を離れるのだろうか。

「新しい人がいるの？」

聞いた直後、踏み込みすぎたと思った。

「ごめん。答えなくていい」

「いないよ」

恭介さんはすぐに答えた。

「そういう理由じゃない」

安堵した。

その感情が顔に出そうになり、私は弁当へ視線を落とした。

「いつ希望を出したの？」

少し間を置いて、恭介さんが答えた。

「綾子の一周忌の翌日」

一年半前ではない。

半年前だ。

一周忌の日の光景が、鮮明によみがえった。

親戚が集まり、姉の思い出を語った。母は何度も泣き、父は黙って酒を飲んだ。

私は最後まで残った。

散らかった食器を洗い、恭介さんがそれを拭いた。

姉が生きていた頃にも、何度かそうしたことがある。私は家のどこに何があるのかを知っていた。洗った皿を恭介さんに渡し、恭介さんは戸棚の決まった場所へ戻した。

帰る前、私は台所の床を拭いた。

恭介さんはダイニングに立ち、黙って私を見ていた。

疲れているのだと思っていた。

あの夜、玄関を出るときに言われた。

「もう遅いから、駅まで送る」

私は断った。

「大丈夫。恭介さんも疲れてるでしょう」

恭介さんは、それ以上勧めなかった。

私は一人で駅まで歩いた。

翌日、恭介さんは転勤を希望した。

「どうして、一周忌の翌日だったの？」

私は尋ねた。

恭介さんは、すぐには答えなかった。

本編後半より 官能場面・先行試し読み

「まだ、同じ気持ち？」

「うん」

「ここからは、嫌ならはっきり言って」

「分かった」

「それ以外では、もう止まれないと思う」

私は恭介さんを見上げた。

「止まらなくていい」

その言葉だけでは足りない気がした。

「私、優しくしてほしいくて戻ってきたんじゃない」

恭介さんの目が変わった。

「そんなことを言って、あとで撤回するな」

「しない」

次の瞬間、肩を押されて布団へ倒された。

両手首をまとめて頭の上へ押しつけられる。

ベッドを解体していたときは、すぐに離された。

台所では、私に触れないためにカウンターをつかんでいた。

その手が今は、私を逃がさない。

驚いて息をのみ、そのまま唇を塞がれた。

先ほどまでとは違う。

舌を深く入れられ、逃げようとする私の舌を追いかけるように絡め取られる。

片手で両手首を押さえたまま、もう一方の手が身体を強く撫でた。

胸をつかみ、腰のくびれをたどり、スカートの上から太腿を押し開く。

「恭介さん……」

「今さら、その呼び方で僕を止められると思うな」

「止めようとしてない」

「なら、脚を開け」

低い命令に、身体の奥が震えた。

自分から膝の力を抜く。

恭介さんの身体が、開いた脚の間へ入ってきた。

硬くなったものが、衣服越しに押し当てられる。

これほど求められている。

その事実だけで、濡れていくのが分かった。

恭介さんの手がブラウスの襟元をつかんだ。

一気に左右へ開かれる。

乾いた音がして、ボタンが一つ畳の上を跳ねた。

恭介さん自身が、その音に一瞬だけ動きを止めた。

けれど、もう謝らなかった。

「十二年も僕に隠してた顔を、今夜は全部見せろ」

開かれたブラウスの隙間から、下着の中へ手が入る。

乳房を強く包まれ、硬くなった乳首を指でつままれた。

「あっ……」

「声を隠すな」

家具の減った家は、私の声を隠してくれなかつ

た。

「……っ、……あ、ツ……」

小さく漏らしたつもりでも、空になった部屋と廊下へ響いていく。

恭介さんは、それを聞こうとするように私を見ていた。

「もっと声を聞かせろ」

下着の内側に入った指で、乳首を強く擦られ、背中が反った。

「……ん、っ……ああッ、……あっ……！」

逃げられないように押さえられていることが、怖いはずなのに嬉しかった。

私が望まなければ、この人はすぐに手を離す。

それを知ったうえで、力ではかなわない男性に
押さえ込まれている。

恭介さんの唇が首筋から胸元へ下りた。

ブラウスと下着を押し下げられ、乳房が露わに
なる。

片方を強く揉まれながら、もう片方の乳首へ舌
を這わせられた。

先端を舐め上げ、口に含み、吸い上げる。

「……あああ、……あつ、あ、ツ……！」

「濡、僕を見ろ」

目を開いた。

胸へ唇を押し当てながら、恭介さんは私を見ている。

姉の夫だった人。

義兄と呼ぶべきだった人。

けれど、そのどちらでもない目で私を求めている。

一瞬だけ、姉の顔が浮かんだ。

身体が固くなる。

恭介さんの動きが止まった。

「今、ここにいるのは私」

自分に言い聞かせるように口にした。

恭介さんの目を見た。

「姉さんじゃない」

「分かってる」

迷いのない声だった。

「滯を見てる」

物静かな義兄が、このあと滯に何を見せ、何を言わせるのか。

十二年間の恋が一線を越える夜の続きは、製品版でお楽しみください。